



Title	インド洋海域交易で運ばれたミャンマー青磁
Author(s)	佐々木, 達夫; 野上, 建紀
Citation	多文化社会研究, 5, pp.205-217; 2019
Issue Date	2019-03-18
URL	http://hdl.handle.net/10069/38915
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-20T15:29:43Z

インド洋海域交易で運ばれたミャンマー青磁

金沢大学 佐々木達夫

長崎大学 野上 建紀

Mediaeval Myanmar celadon traded in the Indian Ocean

Tatsuo Sasaki (Kanazawa University)

Takenori Nogami (Nagasaki University)

Abstract

At the end of the 20th century, the production and type of Myanmar ceramics were discovered. Before its discovery, Myanmar celadon were believed to be pottery produced in Thailand. We excavated Myanmar celadon at the archaeological sites in the Arabian Peninsula and the Indian Ocean countries. The age of those celadon was during the latter half of the 14th century and the first half of the 16th century. So, we discovered the history of mass distribution to various parts of the Indian Ocean in the medieval times. Ceramics from Myanmar were not accidentally brought to the Indian Ocean countries but one of the major products of the Indian Ocean maritime trading system. The Myanmar celadon were already discovered in the Indian Ocean region such as India, Iran, the United Arab Emirates, Bahrain, Oman and Yemen. The newly collected piece of Myanmar celadon dish on the Kilwa island coast of Tanzania is valuable material for considering the distribution areas.

Key Words: Myanmar celadon, Indian Ocean, Trade, East Africa, Kilwa

1. はじめに

中国陶磁器のインド洋交易については20世紀初頭からイラクのサマラ遺跡やエジプトのフスタート遺跡などの出土資料で研究が始まり、現在は数多い資料と研究成果の蓄積がある。日本陶磁器については日本国内の生産に関する研究は進んでいたが、インド洋海域での遺跡出土資料の発見はきわめて限られており、これからの研究課題である。ミャンマーの陶磁器を利用したインド洋の陶磁器流通については、ミャンマー国内生産と国外流通の両面に関して、研究が始まってからまだ20年にも満たず、研究の蓄積は非常に少ない。ミヤ

ンマー陶磁器とくに青磁が14世紀後半から16世紀末にインド洋海域に広域流通したという歴史的事実を、筆者たちは21世紀初めに発見することができた。ミャンマー陶磁器発見の経緯と研究史、青磁生産と国外流通の概略についてはすでに述べたことがあり（佐々木2016）、本稿の後半ではその内容を要約して利用している。

本稿の目的は、タンザニアのキルワ・キシワニ海岸で採集したミャンマー青磁1片をめぐって、インド洋交易で運ばれた歴史的背景と研究の意義を改めて指摘することである。

2. タンザニア・キルワ島海岸の採集品

2018年夏、筆者の佐々木、野上および金城康哉（長崎大学多文化社会学部4年）は、インド洋に面する東アフリカのタンザニア海岸を訪ねた。都市は世界で共通性が広がるが、地方の農村や漁村は地域ごとの特色が色濃く残ることが多い。タンザニアの田舎でも地元の育つ木の幹や枝を組合せ、枝の間に泥を塗り込め、表面を石灰で塗る家が見られる。この家が遺跡になれば、おそらく室内に残るのは炉の跡、つまり鍋を置くための3個の石と灰のみであろう。そうした家が散在する村の海岸にミャンマー青磁が落ちていたのである（写真1・2）。

キルワ島は9世紀からペルシア商人も来航して居住地とし、13世紀には大きな建築群が建設され、15世紀にはインド洋アフリカ沿岸の最大規模の都市の一つに発展したが、ポルトガルの支配などを経て衰退し廃虚となった。いまは枝葉や土、石で壁と天井を作った家が砂上に散在する小さな村である。



インド洋貿易の拠点としてアラブ人が支配した15世紀は、その頃の様相を彷彿とさせる大宮殿や大モスクの巨大建築遺跡がキルワ島内に点在している。モスク近くには墓地が残

る。一般人の墓は小さいが、支配層の墓は大きな石積建物である。

それらのモスク、宮殿、墓建築の壁には陶磁器の碗や皿が装飾として張り付けられていた。石積の建物壁はすでに崩れ落ちた部分が多いが、残された壁や天井に陶磁器を張り付けた痕跡が石壁の凹みとして残る部分がある。発掘された建物は修復保全も行われ、張り付け陶磁器はすでに壁から剥がされ、現地には僅かな小破片のみが残されているに過ぎない。ダルエスサラーム国立博物館には市内やキルワ島などの建物壁から外した数点の陶磁器が展示されており、陶磁器が壁に貼り付けられた状態の写真パネルも置かれる。壁装飾に陶磁器を用いる地域文化の存在を示している。

ケンブリッジ大学のチチック教授は1958年から1965年にキルワ島の大規模発掘を実施した。当時、彼が居住していた家も廃虚状態となり、キルワ島海岸に残る。1970年代に発掘報告書全2冊が刊行され、建築壁面に張り付けられた陶磁器も紹介された。中国の青磁や染付の碗や皿が目立つようであるが、イランの青釉黒彩陶器や緑釉陶器、あるいは白釉青彩の染付写し陶器も使われたことが壁面に僅かに残る部分から推測できる。日本の伊万里焼もスルタン墓を囲む石壁面に1点張り付けられたことが報告書に記されている。17世紀後半の有田芙蓉手大皿である。白い素地に青色で文様を描いた染付は、室内装飾用に好まれた種類であったと想像される。

中世の大建物跡、とくにモスク壁や天井、支配層の墓壁に陶磁器を張り付ける風習は、ダルエスサラームやその北方にあるバガモヨ、タンザニア南部のキルワなどタンザニア各地に存在していたらしい。広範囲の文化圏に共通する建築装飾方法である。イランは装飾タイルが広く建築壁に使用されたが、アラビア半島はタイル装飾の文化がなく、陶磁器を壁に張り付ける習慣はない。陶磁器を壁装飾に用いたタンザニア海岸地域の文化は、東南アジアと共通性を示す一つの例である。インド洋交易がもたらした文化交流の一面を見ることができる。

アフリカ東岸は季節風を利用した大型帆船によるインド洋交易が活発に行われた地域で、多くの物資とともに中国の陶磁器も運ばれていたことが知られる。チチック教授の住んだ家の前の砂浜には波で洗われた陶磁器片が石ころに混じって散在している。龍泉窯の青磁碗や景德鎮の染付などの他に、ミャンマー産の青磁大盤の高台部片も落ちていた。ミャンマー青磁はアラビア半島の14世紀から16世紀の遺跡では一般的に見られる大量流通品である。カイロのフスタート遺跡やアラブ首長国連邦のジュルファール遺跡、コールファッカン遺跡、ディバ遺跡など各地の遺跡で筆者はかなりの量を発掘したが、オマーンやイエメ

ンの踏査でも多くの遺跡で容易に見ることができた。それと同じ種類の青磁盤の破片がキルワ島の海岸にも落ちていた。インド洋貿易で広範に流通したことを推定させる資料の一つとなる。この種類の陶磁器をエジプトやアラビア半島の遺跡では20世紀末までタイ陶磁器と筆者は分類していたが、21世紀初めに筆者たちがミャンマー産であることを発見した。思い出深い種類の青磁を拾うことができたのは、今回のタンザニア訪問の嬉しい収穫の一つである。

3. 20世紀末までのミャンマー陶磁器の研究状況

ミャンマー陶磁器は産地も製品も時代も長い間、不明瞭であった。20世紀末まで筆者もミャンマー青磁をタイ陶磁器と誤認し、タイ青磁と紹介していた (Sasaki 1991)。カイロのフスタート遺跡は中国や各地の陶磁器が出土する流通拠点としての都市遺跡である。20世紀初めから100年を超える発掘で掘り出された陶磁器の量と種類の豊富さで世界的に有名な遺跡である。1980年頃、三上次男は中国やタイの磁器ではない灰釉陶器をタイ青磁の一種としていた。フスタート遺跡で三上に指導された筆者や当時の欧米陶磁器研究者も三上の同定を受け入れていた。同類の青磁はシナイ半島ツールなどエジプトの他遺跡でも多く発見され、広範囲に大量に流通していたと推定することができた。

1980年代末、筆者の佐々木はアラビア (ペルシア) 湾の港町遺跡ジュルファールを層位的に発掘した。15世紀前半の層内に中国陶磁器より多く出土する東南アジア産の青磁盤があった。それはフスタートでタイ青磁としたものであった。砂丘上に14世紀中頃に港町が築かれ、17世紀にポルトガルの攻撃で廃墟となった地域拠点の遺跡からの出土である。

1990年代、その青磁の産地について、筆者は疑問を持っていた。同じ種類の陶磁器をタイの窯跡で見つけることができず、調べるほどに産地は不明瞭となった。タイ青磁はシーサッチャナライやスコタイなど白く硬い磁器素地で、北タイの青磁は粗く硬い素地である。それと異なり、締まりのない粗質灰色素地に黒粒状に見える空隙がある素地である。釉も灰緑色に発色する木灰釉で、シーサッチャナライなどのガラス質釉と違う。

エジプトやイエメン、オマーン、アラブ首長国連邦、バハレン、イランなど、インド洋に面した遺跡を踏査すると地表面ですぐに見つけることができ、広範囲に流通していたことが明らかなこの青磁は、タイ陶磁器に製作技術が似ているが同じではなく、素地はまったく違う。釉調や刻線文はパーン窯やワンヌア窯など北タイ青磁の雰囲気に近い部分も

あったが、同じものはタイ国内の窯跡で発見することができなかった。最近の調査で窯跡出土品が増えたベトナムやカンボジアの陶磁器でもなかったし、東南アジアに隣接するバングラデシュやインドの陶磁器でもなかった。佐々木はミャンマーで造られた可能性を指摘していたが、高温多湿のデルタ地帯の窯跡を現地調査することにはためらいがあった。そこで、1990年代はタイの窯跡出土の青磁片とジュルファール出土青磁片を化学分析し（Sasaki, et al. 1992, 1994, 1995）、素地を剥片にして岩石学的に観察し（佐々木ほか 2000）、産地を特定する研究を進めた。タイの窯跡とジュルファール出土の青磁素地を主成分や微量元素で比較すると、ジュルファールの青磁はタイに近いものとして分類できた。しかし、眼で見ると同じものはなかった。これは、比較する資料群のなかにミャンマー陶磁器が無かったためである。

4. ミャンマー青磁窯跡と製品の特徴

1990年代にミャンマーで窯跡が発掘調査され、青磁碗皿が焼かれ、年代は15世紀から17世紀頃とされた。2002年には津田武徳もトワンテ窯跡群のパヤジー窯跡を発掘している（津田 2002, 2004）。いずれもトワンテ及びその周辺のエーヤワディ・デルタに所在する窯跡で、トワンテはヤンゴン西方30kmほどに広がる大規模な青磁窯跡群として著名になった。1999年に発掘されたトワンテ窯跡は川岸テラス斜面上にあり、小型単室横焰式のレンガ積地上式窯である。焼成煉瓦を1列積み上げて壁とし、燃焼室と焼成室、煙突で構成されている。燃焼室と焼成室の間に段があり、緩い傾斜の焼成室中央部に天井を支える柱がある。2002年と2003年の踏査でトワンテ地域の窯跡群から採集した主要製品は青磁の盤と碗で、褐釉もあるが、いずれも基本的な成形技法、装飾技法、焼成技法に大きな違いはないことが分かった（佐々木ほか 2004）。

盤は口縁部が折縁で、胴部は緩やかに丸みをもち、高台は径が広く低い。碗は胴部に丸みがあり、底面は厚く、高台はやや高く削られ、内側面が外に向かってやや開く。盤および碗に太い一定幅の刻線文が施され、文様は拙く粗い。碗外面に刻線の蓮弁文があり、盤内面に刻線の蓮弁文、盤内面中央部に1本または2本の刻線圏線がある。盤口縁部に刻線による蔓巻文が施され、細かい輪花となるものもあるが、無文の製品が多い。

5. ジュルファール遺跡出土ミャンマー青磁の特徴

ジュルファールはアラビア湾の入口、ホルムズ海峡に近いアラブ首長国連邦ラッセルカイマ首長国の港町遺跡である (Sasaki, Sasaki 1992, Sasaki 1993, Sasaki 1994, 佐々木 1993, 佐々木・佐々木 2005)。1987年にジュルファール遺跡を踏査して採集した青磁盤を現地で百点以上実測し、筆者はその青磁をタイ産であるとした。1988年から6次にわたる発掘をジュルファール遺跡で行い、14世紀中頃に始まる第7層から15世紀中頃の第1層に分けて遺物を取り上げた。中国の染付、青磁、白磁、色絵、黒褐釉陶器、タイの鉄絵、青磁、ミャンマーの青磁、ベトナムの灰釉陶器、白磁、染付、鉄絵、イランの白濁釉陶器、白濁釉黒彩陶器、青釉陶器、緑釉陶器、褐釉陶器、土器、それに大量の現地産の彩文土器や土器などが出土した。

ジュルファール遺跡から出土する中国やイラン、東南アジアの陶磁器を層位・種類・器種別に分類計量し、それらの出土比率を計測した (佐々木 2006)。出土品の分類と量が確定した段階で、ミャンマー産の青磁の層位的割合と出土量から、短期間に限定された種類である青磁盤の破片が大量に出土する状態が分かった。出土する破片はほとんどが盤であるが、個体数で見ると盤と碗が主となり、窯跡で見られた小瓶や動物像などは運ばれていない。同層位内の組み合わせ陶磁器量を数値化し、素地や釉の類似性と違い、成形技術等によって出土品を分類した。ミャンマー産と推定した青磁から盤6点、碗5点の計11点を選び、分析資料とした。ジュルファール遺跡の同種類の青磁と白濁釉陶器の素地は、機器中性子放射化分析を実施したが (佐々木ほか 1993)、産地を決定できる比較資料がその当時はなかった。

青磁は黄緑色から灰緑色の透明釉を素地上に直接にかけ、細かな貫入が入り、半濁した釉もある。青磁と言うよりも灰釉陶器とするほうがより正確である。素地は灰色、灰白色と、淡赤黄色がある。硬く焼けたものは濃い灰色となる。淡赤黄色の素地は粗く、空隙が多い。含有する粒子は黒色や白色の鉱物粒子が多く、弱還元焰焼成の発色である。底部が黄色で、胴部から口縁部にかけて灰色となる素地もある。轆轤回転は、成形が右回転、高台削りが左回転である。器形は、盤口縁部は折縁となり、口縁径は広く、高台は低く径が広い。碗は口縁部がわずかに外反し、口縁端部の外側が膨らむものと、膨らまないものがある。碗の底面は厚く、高台はやや高く削る。盤にはやや細い刻線文を施し、内面の周辺に刻線の蓮弁文、内面中央部に刻線の圏線がめぐる。小さな孔を穿ち細い銅線を通して縛っ

た補修孔が残る破片がある。盤は釉が内面全面と外面高台際または高台外側面までかかり、高台内は無釉となる。盤高台内の下面中央部に回転糸切痕が残り、その周辺部は回転へら削りした痕跡が残る。高台内の周辺部が褐色に焼けたものもある。碗の施釉は内面全体と外面高台際または高台外側面までで、高台下端部及び高台内は無釉である。高台内に鉄が化粧として塗られ、褐色となるものがある。

これらジュルファール遺跡出土の青磁はトワнте窯跡の青磁に類似するが、トワнте青磁には見ることができないものもある。

6. トワнте窯跡とジュルファール遺跡の青磁比較

トワнте採集の資料はアラビア半島で出土する製品と器種構成が近く、地元で使うと同時に海外輸出向けとして生産したと推定できる。窯跡採集の種類も限られ、窯ごとの差も比較的小さく、製品の時期的な変化が見えにくい。海外輸出時代を迎えた限られた時代に一斉に大量に青磁を生産した状態と推測できる。

製品内容が判明したトワнте窯跡採集青磁とジュルファール遺跡出土青磁の類似点と相違点を比較した（佐々木・佐々木 2002）。比較方法は類似する成形技術と器形の陶磁器を選び、釉と素地を肉眼観察し、素地の薄片を作成して偏光顕微鏡で観察し、コンピュータで画像比較・数値的検討を実施した。なお、ジュルファール遺跡出土のミャンマーの青磁と白濁釉陶器、オマーンのアルバリッド採集のミャンマー白濁釉陶器は、機器中性子放射分析等で元素分析を実施した（佐々木ほか 1993）。

扱った青磁資料は、トワнте窯跡採集青磁、その窯跡群の製品と推定したジュルファール遺跡出土青磁、及びこれまでジュルファール遺跡出土東南アジア製品の産地の一つに挙げた北タイ窯跡採集青磁、それにジュルファール遺跡出土のベトナム灰釉陶器である。白濁釉陶器資料はジュルファールやハレイラ、オマーンのアルバリッドなどの遺跡出土品などである。青磁と白濁釉陶器は素地が異なり、トワнте窯跡では白濁釉陶器は見られず、ミャンマー国内で生産した地域が違う。

偏光顕微鏡で観察した資料は、トワнте窯跡採集青磁及びミャンマー陶磁器と肉眼観察で判断できたジュルファール遺跡出土品、タイ窯跡青磁とベトナム灰釉陶器である。青磁素地剥片の偏光顕微鏡観察で、トワнте採集青磁の盤7点、碗2点がほぼ同じグループに分類できた（佐々木ほか 2000）。

ジュルファール出土青磁の偏光顕微鏡クロス写真は2種類に分かれた。Ⅰ類は石英を主とする小さな鈳物粒が全面に広がり、その中にやや大きめの鈳物粒が見られるもの。Ⅱ類は小さな鈳物粒が全面に見られることは共通するが、大きめの鈳物粒が含まれないもの。Ⅰ類とⅡ類のいずれも碗と盤があり、その形や釉色、成形技法は類似する。出土層位はいずれも1層から3層が主となり、素地の違いで型的・層位的な分類は難しい。

トワンテ採集青磁のクロス写真はジュルファール出土青磁Ⅰ類と類似し、全面に広がる小さな鈳物粒のなかにやや大きな石英を主とする鈳物粒が混じる。資料 Twt 1 - 9 には碗と盤があり、器形はジュルファール出土品とほぼ同じである。偏光顕微鏡観察でトワンテ資料はほぼ同じ素地に分類でき、ジュルファール出土品はそれに類似するⅠ類と、石英粒子の粒径が異なるⅡ類に分類できた。インド洋に流通したミャンマー青磁は、トワンテ窯跡製品が多いが、その他の窯跡で焼かれた製品もあることになる。この時代の青磁は釉調や釉色がほぼ類似し、眼で見ると同じグループに分類されてしまう可能性が高い。

7. ミャンマー陶磁器研究の新展開

こうして、ミャンマーの窯跡採集青磁とアラビア半島遺跡出土青磁の歴史的な関連性が判明した。14世紀後半から16世紀末にインド洋貿易を支えたミャンマー陶磁器生産と、東南アジアの農業林業の生産力を背景にした貿易活動の実態を窺うことができる。インド洋を運ばれた中国や東南アジアの陶磁器のなかで、この時期のみミャンマー青磁の盤と碗が多いのは、東南アジアの陶磁器生産と貿易を考える新たなデータとなる。

資料の産地同定などの研究状況が変化するなかで、アラビア半島の遺跡から多く出土する青磁とミャンマー産青磁の比較検討が可能となり、ジュルファール出土青磁の産地研究について新たな局面が開けた。1999年に陶磁器研究会がミャンマーで開かれ、日本から吉良文男が参加してトワンテ窯跡で青磁片を採集した。2001年に金沢大学で「東南アジア陶磁器の生産と流通」研究会が開催され、その青磁片のもつ歴史的な意義を評価することができた(佐々木達夫・佐々木 2002、佐々木花江・佐々木 2002、Sasaki, Sasaki 2002、吉良 2002、Myo 2002、佐々木・吉良ほか 2003)。こうした過程を経て、インド洋海域に大量流通した東南アジア青磁盤の産地問題を解くことができ、ミャンマー各地の窯跡製品分類を進める段階に入った。

筆者たちは2002年と2003年にミャンマーの窯跡を踏査し、ミャンマー青磁窯跡の立地や

窯構造、分布などの特徴、及びその製品の概略を捉えた（佐々木ほか 2004）。いずれも中国やタイと比べ、質の劣る大量生産・少品種の製品であり、海外輸出を意識した産地であることが判明した。水運に恵まれたエーヤワディー川デルタ地帯にあり、トワントを中心にして窯跡が広がっていた。粘土と水、燃料が豊富にある産地で、縦横に張り巡らされた運河は容易に海につながる輸出地として、大量生産に有利な場所であった。それは、中国広東省のルソン壺と呼ばれた陶器や、碗、盆、壺、大瓶など、輸出陶磁器を生産した珠江デルタ地帯に広がる広州窯跡群に匹敵する巨大な規模であった。

8. ミャンマー陶器の流通

日本の遺跡から出土する東南アジア陶磁器は、14世紀後半はベトナムが多くタイが少ない。中国で海禁令が施行された15世紀はベトナムよりタイの陶磁器が増える。16世紀から17世紀はベトナム焼締長胴瓶とタイの無釉壺、褐釉壺や鉄絵などが西日本や京都の遺跡で一般化する。日本の遺跡で発見されたベトナムやタイの陶磁器は、碗や合子、壺にほぼ限られる。東南アジアで人々が生活に用いた陶磁器全体ではなく、貿易活動で運ばれた限られた種類が目立つ。タイ陶磁器はスンコロク・宋胡録、北部ベトナム陶磁器は安南、中部ベトナム陶磁器は南蛮焼・焼締長胴壺・切溜などと呼ばれ、茶の湯で使用されたことが知られている。だが、カンボジアやミャンマーの陶磁器は日本の遺跡から長い間発見されなかった。最近、東南アジアと交易活動があった西日本の都市遺跡からミャンマー陶磁器がほんの数点ずつ見つかり始めた。黒褐釉陶器壺は博多（福岡市教委 1992）と大分市府内町遺跡（大分市教委 2003）から出土し、その後、沖縄や長崎などでも出土した。白濁釉陶器盤は平戸和蘭商館跡（平戸市教委 1988）と堺環濠都市遺跡から1点ずつ出土した（森村 1999）。16世紀後半の西日本の貿易拠点都市と港町遺跡からの発見である。ミャンマー陶磁器はインド洋、南シナ海に流通した大型黒褐釉壺と青磁盤が主製品であるが、そのうちの限られた種類の僅かな量のみが、ミャンマー陶磁器流通圏の周辺地域となる西日本に達していた。

フィリピン沖に沈んだ15世紀後半の沈没船とされる *Lena Cargo* や1600年に沈没した *San Diego*、1613年に大西洋で沈没したという *Witte Leeuw* の積荷の中にも、ミャンマー陶器が見える。2000年刊行の *Lena Cargo* 報告書は、今はミャンマー産と判明した青磁盤と褐釉盤の計5点を産地不明として紹介している（Goddio, et al. 2000）。

西アジア各地にはミャンマー青磁が広く流通していた。筆者は1987年にイエメンやオマーン、バハレン、アラブ首長国連邦の遺跡踏査を実施したが、15～16世紀の遺跡ならどこでも地表面でミャンマー青磁片が採集できた。それよりやや遅れる17世紀までの遺跡では、数は減るが白濁釉陶器片があった。その後も、イエメンやオマーンの海岸に沿って遺跡踏査を続けたが、中世遺跡から中国陶磁器と一緒にミャンマー青磁を必ずと言って良いほど発見することができた。1988年から発掘を継続しているアラブ首長国連邦の遺跡では、ジュメイラ、ジュルファール、ハレイラ、デイバ、コールファッカンなど、どの遺跡を掘ってもミャンマー青磁が発見され、アラビア半島に広く流通したことが確認できる。イランでもミャンマー青磁盤は遺跡で採集でき、インドでもミャンマー青磁盤が出土する(Sasaki 2004)。

ミャンマー陶磁器は青磁の他に黒褐釉陶器と白濁釉陶器が広範に流通している。黒褐釉陶器は大型貯蔵用壺が大部分を占め、最近ではマルタバン壺と呼ばれる。イブン・バツータは14世紀中頃に西方に運ばれた陶磁器をマルタバンと呼び、それはマルタバンから輸出した陶磁器を指していた。黒褐釉壺はミャンマー国内やインド洋各地で今も使用され、黒褐釉大壺はインド洋沿岸各地に広がり、カイロにも多数が残されている(佐々木 1989)。

マレー半島以西のインド洋にミャンマー青磁が広がることは、当時の主要なミャンマー陶磁器交易圏を示している。デルタ地帯に世界的規模の窯跡群が成立し、貿易品を生産した。その生産時期は14世紀中頃からと推定することができる。13世紀末から14世紀初めのアラビア半島ルリーヤ遺跡には、イラン、イエメンの陶器の他に中国の青磁と白磁のみがあり、東南アジアから運ばれた陶磁器は含まれていない(Sasaki, Sasaki 2001, 佐々木・佐々木 2002)。しかし、14世紀中頃以降の中国青磁が多く出土するジュルファールでは、15世紀前半に陶磁貿易の内容が変わる。中国の青磁や染付の出土量は多いが、それと同様に出土するのがミャンマー青磁である(Sasaki, Sasaki 2003, 2009)。タイやベトナムの陶磁器は少ない。

16世紀後半は白濁釉陶器盤や白濁釉陶器緑彩盤がミャンマーから輸出された。青磁より数量は少ないがインド洋貿易の積荷でもあり、アラビア半島沿岸各地の遺跡で容易に見られる。アラビア湾岸のジュルファール、ハレイラ(Sasaki 1995, 1996)、オマーン湾岸各地(佐々木 2005・2007a,b)、とくにコールファッカン(佐々木・佐々木 2008・2010)、カルハットやアデン湾岸のアルバリッドなどのオマーンの遺跡、紅海奥部のトゥール遺跡、さらにサウジアラビア、イエメン、イランなどでも、発掘や遺跡踏査で白濁釉陶器は目に

付き、広域交易品の一つであった（佐々木ほか 1993・2002・2003）。インドのコタパティナムでもミャンマー青磁とともに白濁釉緑彩陶器が出土した（Sasaki 2004）。こうして白濁釉陶器は16世紀後半にインド洋沿岸へ貿易品として運ばれたことが判明した。

9. おわりにーキルワ島海岸採集のミャンマー青磁のもつ意義

王朝交代や産地盛衰などに影響されながら、自然環境に適応した生活で用いるための陶磁器が東南アジア各地で造られた。それらの陶磁器が地域文化圏外に流通するのは13世紀を過ぎてからのことで、14世紀後半から16世紀末は東南アジア陶磁器の海外輸出の最盛期となった。

ミャンマー青磁の存在は20世紀末に知られ、21世紀初にその青磁盤が14世紀後半から16世紀前半にかけ、インド洋各地に大量流通した歴史が判明した。15世紀前半をピークにミャンマー青磁がインド洋海域交易で占めた役割の大きさと歴史的な意義が、産地と消費地の遺跡出土品の比較で浮かび上がったのである。ミャンマー産陶磁器は偶発的に国外に運ばれたのではなく、インド洋海域海上交易システムの主要製品の一つとなった。ミャンマー陶磁器は東アジアへの流通量がきわめて少なく、東南アジア海域とインド洋海域に向けた商品であった。インド洋海域のインドやイラン、アラビア半島で発見されていたミャンマー青磁が、新たにタンザニアのキルワ島海岸で採集されたことは流通圏を考えるための貴重な資料となる。

今回の調査研究にあたり、多くの方のご支援とご協力を賜った。芳名を記し、心よりの謝意としたい。
渡辺芳郎、高野季久美、末次健太郎、増田研、竹内俊之、中山さつき、福満博子（順不同、敬称略）

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02375の助成を受けたものです。

参考・引用文献

- 大分市教育委員会 2003『大友府内5・中世大友府内町跡第3次調査報告』
吉良文男 2002「ミャンマー青磁窯跡」『金沢大学考古学紀要』26号、16-19頁
佐々木達夫 1989「エジプトで中国陶磁器が出土する意味」『考古学と民族誌』六興出版、227-250頁
佐々木達夫 1993「アラビア湾の港湾都市遺跡」『金沢大学考古学紀要』20、1-44頁
佐々木達夫 2002「東南アジアの窯跡と日本出土の東南アジア陶磁器」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会、300頁
佐々木達夫 2005「アラブ首長国連邦オマーン湾岸のイスラーム時代町跡」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』25、39-192頁

- 佐々木達夫 2006 「ジュルファール出土陶磁器の重量」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』26、51-202頁
- 佐々木達夫 2007a 「オマーン湾岸北部地域の遺跡出土陶磁器」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』27、203-282頁
- 佐々木達夫 2007b 「西アジアに輸出された14～15世紀の東南アジア陶磁器」『青柳洋治先生退職記念論文集』雄山閣、23-36頁
- 佐々木達夫 2016 「ミャンマー陶器の発見と広域流通」『中近世陶磁器の考古学』第4巻、雄山閣、229-251頁
- 佐々木達夫・吉良文男・佐々木花江 2003 「ミャンマー陶磁の発見」『貿易陶磁研究』23、106-123頁
- 佐々木達夫・佐々木花江 2002 「アラビア半島に広がるミャンマー青磁の発見」『金沢大学考古学紀要』26、1-11頁
- 佐々木達夫・佐々木花江 2005 「発掘資料解釈と景観復元によるジュルファールの都市的性格検証」『オリエント』48-1、26-48頁
- 佐々木達夫・佐々木花江 2008 「コールファッカンの砦と町跡の発掘調査概要」『金沢大学考古学紀要』29、60-175頁
- 佐々木達夫・佐々木花江 2010 『シャルジャ、砂漠と海の文明交流—アラビアの歴史遺産と文化—』シャルジャ展日本開催委員会
- 佐々木達夫・西田泰民・富沢威・小泉好延 1993 「アラビア海沿岸出土陶磁器の元素分析」『東洋陶磁』20・21、195-209頁
- 佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江 2004 「ミャンマー窯跡踏査と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』27、147-246頁
- 佐々木達夫・向井互・楠寛輝 2000 「北部タイ窯跡出土陶磁器素地の偏光顕微鏡観察」『金沢大学考古学紀要』25、74-117頁
- 佐々木花江・佐々木達夫 2002 「緬甸青瓷、其窯跡及在15至16世紀中向印度洋地区的出口貿易」『古陶瓷科学技術国際討論会論文集』5 上海科学技術文献出版社、589-597頁
- 津田武徳 2002 「クメール・タイ・ミャンマーの陶磁」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会、292-299頁
- 津田武徳 2004 「ミャンマー陶磁とその周辺について—最近の発掘例を中心に—」『東南アジアの古陶磁(9) ミャンマーとその周辺』富山市佐藤記念美術館、7-28頁
- 平戸市教育委員会 1988 『平戸和蘭商館跡』
- 福岡市教育委員会 1992 『博多30 博多遺跡群第60次発掘調査報告書・福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集』
- 森村健一 1999 『堺市文化財発掘調査概要報告第82冊・長曾根遺跡発掘調査概要報告』堺市立埋蔵文化財センター
- Goddio, Pierson, Crick, 2000, *Sunken Treasure: fifteenth century Chinese ceramics from the Lena cargo*, Periplus, London.
- Myo Than Tyn, 2002, *Tradition of Myanmar glazed ceramics and its historical status in Southeast Asia*, 『金沢大学考古学紀要』26号、20-26頁
- Sasaki, H., 2004, *Chinese and Thai Ceramics in Kottapatnam*, in N.Karashima ed. "In Search of Chinese Ceramic-sherds in South India and Srilanka", 16-20+Pls.8-12, Taisho University Press.
- Sasaki, H., Sasaki, T., 2002, *Myanmar green ware — the kiln sites and trade to the Indian Ocean in the 15-16 centuries*, "Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa", 26: 12-15.
- Sasaki, H., Sasaki, T., 2009, *Chinese and Southeast Asian Ceramics found at the Archaeological sites on the Arabian Peninsula*, "National Palace Museum Bulletin" Vol.42, 21-31, Taipei.
- Sasaki, T., 1991, *Vietnamese, Thai, Chinese, Iraqi and Iranian Ceramics from the 1988 Sounding at Julfar, Al-Rafidan*, XII: 205-220.
- Sasaki, T., 1993, *Excavations at Julfar in 1992 season*, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 20: 45-49.
- Sasaki, T., 1994, *1993 Excavations at Julfar*, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21: 1-

- Sasaki, T., 1995, 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*『金沢大学考古学紀要』22 : 1 -74.
- Sasaki, T., 1996, 1995 Excavations at Jazirat al-Hulayla, Ras al-Khaimah, "Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa", 23: 37-178.
- Sasaki, T., Sasaki, H., 1992, Japanese Excavations at Julfar—1988, 1989, 1990 and 1991 Seasons—, *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, 22: 105-120.
- Sasaki, T. & Sasaki, H., 2001, Excavations at Luliyah Fort, Sharjah, U.A.E., *Tribulus*, 11-1, 10-16.
- Sasaki, T., Sasaki, H., 2003, Southeast Asian Ceramic Trade to the Arabian gulf in the Islamic Period, Daniel Potts, Hasan Al Naboodah, Peter Hellye eds. "Archaeology of the United Arab Emirates" 253-262, Trident Press, London.
- Sasaki, T., Koezuka, T., Ninomiya, S., Osawa, M., Yamasaki, K., 1992, Excavations of Archaeological sites in Bahrain and the United Arab Emirates and Technical Studies on the Excavated Sherds, "Science and Technology of Ancient Ceramics", Shanghai Research Society of Science and Technology of Ancient Ceramics. 230-234.
- Sasaki, T., Koezuka, T., Ninomiya, S., Aboshi, M., Osawa, M., Uchida, T., Sasaki, H., and Yamasaki, K., 1994, Technical Studies on the Ceramics Excavated from Julfar in Ras Al-Khaimah, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 21: 107-125.
- Sasaki, T., Ninomiya, S., Aboshi, M., Koezuka, T., Shirahata, H., Yamasaki, K., 1995, Technical studies on the ceramics from the archaeological sites in West Asia, *Science and Technology of ancient ceramics 3*, proceedings of the international symposium (ISAC'95), Shanghai research society of science and technology of ancient ceramics, 267-273.